

第15期第7回青森県生涯学習審議会 会議概要

日時	令和4年9月13日(火) 10:00～12:00
場所	青森県庁南棟5階 教育委員会室
出席者	<p>《 委員 》 敬称略12名</p> <p>越戸 順子 齋藤 郁子 小寺 将太 米田 大吉</p> <p>中村 奈津世 吉川 康久 工藤 貴子 柏谷 至</p> <p>深作 拓郎 松浦 淳 小笠原 秀樹 岩本 美和</p> <p>《 事務局 》 9名</p> <p>渡部 泰雄(生涯学習課長) 北風 州康(学校地域連携推進監・課長代理)</p> <p>工藤 奈保子(生涯学習課 企画振興グループ 総括主幹)</p> <p>高井 和紀(学校教育課 課長代理) 他5名</p>
内容	<p>1 開 会</p> <p>2 案 件</p> <p>(1) 重点審議事項1に係る最終答申案について</p> <p>(2) その他</p> <p>3 閉 会</p>
配付資料	<p>次第・青森県生涯学習審議会委員名簿・座席図</p> <p><資料></p> <p>1-① 重点審議事項1に係る最終答申案 構成案</p> <p>② 構成修正の新旧対照表</p> <p>2-① 重点審議事項1に係る最終答申案</p> <p>② 重点審議事項1に係る最終答申案(見え消し)</p> <p>3 おわりに</p> <p>4 第1章に関する調査結果</p> <p>5 第1章に関する実地調査概要</p> <p>6 第15期青森県生涯学習審議会・第35期青森県社会教育委員の会議スケジュール</p> <p>《参考資料》</p> <p>1 第1～6回会議における意見の整理</p> <p>2 第6回青森県生涯学習審議会 会議概要</p> <p>3 諮問書</p> <p>4 実地調査の結果</p>

会議の内容

1 開会

(内容省略)

2 案件

会長 今日生涯学習審議会最後の会議となり、答申案の最終確認となる。事前に目を通していただいているが、その後の修正もあるので、改めて確認していただきたい。また、後半には、2年間の審議会の感想を述べていただく時間も設けている。いつもどおり活発な意見をいただきたい。それでは、案件1について事務局から説明していただきたい。

(事務局から説明)

会長 説明のあった答申案、巻末資料について質問や意見を述べていただきたい。また、事前確認の後に、委員からの意見に基づいて追加されている部分がある。この点について、意見を出された委員から補足説明があればお願いしたい。

委員 補足説明をしたい。県内の全公立高校では、来年度からあおもり創造学という学習に取り組むことになっており、今年度は26校が先行実施をしている。本校では、一人が1テーマに取り組み、郷土、街づくり、栄養、環境、教育など様々な内容の学習を進めているが、この際に、学校と地域社会がつながることができれば、もっと生徒の学びが深まると感じている。学習を進める際は各教師がサポートするが、一人1テーマなので1学年240人の場合240テーマ、3学年分だと膨大な量となりサポートに苦労している現状がある。山形県や岡山県では、高校生の活動を県庁支所や県民局がサポートしている例がある。来年度は全公立高校であおもり創造学が始まるので、ぜひ学校と地域社会の連携ができると、生徒たちがこれから地域とつながっていくきっかけとなるのではないかという思いから、追加をお願いした。

会長 「はじめに」「おわりに」も資料として配られているが、それぞれ説明があればお願いしたい。「はじめに」に関しては、答申の趣旨、審議の経過、答申書の構成についてまとめた内容となっている。

委員 「おわりに」に関しては、これまで7回開催してきた青森県社会教育委員の会議の議論を中心にまとめている。

委員 感想を述べたい。私は保育士養成校の教員として、学生には核家族化している現代において、保育者としていかにネットワークを組んで広げていくか、子どもにとって最初の支援者としてどうあるべきかを大切にしてほしいと考えている。また、親が一人で子育てをすることは苦労する場面も多いので、いかに親が社会と結びつくのが重要であると考えており、そのために社会全体で子どもに関わっていくことの必要性を感じた。

会長 ほかに意見などが無ければ、案件1に関しては、第1章、巻末資料ともに事務局の提案どおりの内容とすることしたい。

次に、本日配付されている参考資料について、事務局から説明していただきたい。

(事務局から説明)

会長 次に、案件2その他ということで、最初に説明したとおり、今日で第15期青森県生涯学習審議会が最後となるので、委員の皆さんから2年間を振り返って感想を述べていただきたい。

委員 生涯学習・社会教育について、言葉では知っていても詳しくは分かっていなかったため、会議の度に「学び」とは何だろうか戸惑いを感じてきた。市町村へのアンケート調査から分かった本県の実態、実地調査での聞き取りを通して、自分たちの周りには、生涯に渡って学び続ける環境づくりに尽力して功績をあげている団体が多数あることが分かるとともに、そのような団体の方々の熱い思いを感じることができ、大変勉強になった。また、今回の答申案では、世界的な流れや日本の将来を見据えた姿、喫緊の課題である新型コロナウイルス感染症感染拡大で見えてきた学習のあり方などの内容が、市町村へのアンケート調査、実地調査とうまくリンクして筋の通った分かりやすい内容となっている。前回からの修正部分も多くあったが、短期間でまとめた事務局に感謝したい。

小学校では、少子化に伴う児童数の減少の一方で、学校で対応することは増え内容は複雑化している。様々な児童が在籍しているが、一人一人の学びを止めないとともに居場所を作ることの重要性を改めて確認することができた。さらに、オンラインに関しては、ルールづくりの必要性など様々な課題が指摘されているが、小学校でも家庭と一緒に学ぶ機会を設け、オンライン学習の入り口である小学校でできることがたくさんあるので、オンライン学習の基礎づくりに力を入れていきたい。最後に、地域とつながるため、小学校もふるさと学習が盛んに行われており、地域の教育力をこれまで以上に学校の中に取り入れている。今後は、単に地域が好きということではなく、地域の一員として当事者意識を持たせた教育へとシフトしていく必要性を感じている。大変勉強になる2年間だった。

委員 先ほど話題に出ていたあおもり創造学のような学びが、高校だけで終わったり、その時に活動している大人だけが支えたりするのではなく、それを学んだ高校生がいずれサポーターやメンターとして活躍するという長いスパンでの仕組みづくりが必要だと思っている。サービスを受けた側が次はサービスを提供する側に回る仕組みができることで、サービスの質も向上し、持続可能な仕組みができあがっていく。この学年だけ、この地域だけという限定的なやり方では、維持が大変で高校が廃校になると活動が終わってしまう。地域の人々が担う様々な役割について、自然と次の世代につながるような仕組みができると、生涯学習は無理に何かをしようとしなくても、うまく回っていくのではないかと感じた。

委員 今回の諮問は、「人と人とのつながり」という部分が前面に出ており、コロナ禍で人間関係がますます希薄化していると言われる中、今の時代に合った難しいテーマをいただいたと思っていた。はじめは、学びのために人のつながりを生かしていくのかと考えていたが、会議を重ね委員の方からの様々な意見を聞くうちに、先に人のつながりがあってそこから学ぶ意欲が湧いてくることの方が多くなるようになった。今の時代、人のつながり方もいろいろあって、Web上でたくさんの人と広く浅くつながる人もいれば、対面でプライベートまで共有する深い付き合い方まであり、この付き合い方が多様化していると考えている。今回の答申では、様々なパターンの情報や具体例などが盛り込まれているので、多くの人にとって参考となる情報を見つけること

ができるのではないかと期待している。2年間、様々な立場の方から専門的な話や人情味あふれる話を伺うことができ、大変勉強になった。

委員 以前の会議の際に「学ぶことは変わる」という教育者の林竹二の話をした。生涯に渡って変わるにはどうすればよいのかということに関して、実地調査から様々な話を聞くことができた。その中で、団体の運営に関して、様々な仕掛けや継続の仕方があることや、活動を続けていくことで急がなくても変化のきっかけは生まれてくることなど、たくさんの学びがあった。また、団体の活動を継続させることに関して、活動の中身を参加者に面白いと思ってもらえる工夫や、参加者にこの活動がなくなったら困ると思ってもらえるようにすることが大事であるなどのヒントを伺うことができた。一方で、答申でも触れられているが、障害者の活動に対するサポートはまだ課題があると感じている。自分が関わっている団体の障害者の女性は、子どもが好きで「お母さんになりたい」という希望があるが、子育てに関するきめ細やかなサポートができるのか、子育てや親になることを学ぶ機会はどうするかなどは、今後取り組まなければならない課題である。

委員 これからのニューノーマル時代の生涯学習・社会教育を考えると、人生100年時代、society5.0、コロナ禍での新しい生活様式など社会全体が急速に変化する中で、私達はより複雑化する課題に直面しているということを感じた。このような時代だからこそ、多様な主体と連携協働することがより一層求められており、今後は、地域・学校・家庭など様々な関係機関が心をつなげて、未来が明るくなる生涯学習・社会教育を目指していくことが必要になると思った。この審議会を通して、その一つの力になることができうれしく思う。実地調査では、日本人財発掘育成協会から話を伺い、高齢社会を迎えた今、若い人の学びも重要であるが、高齢者の学びも重要であると感じた。高齢者による学びと活動の循環は、生きがいや地域の方との新たなつながりを生み出し、ひいては高齢者の孤立防止や新たな価値観の創出にも結びつくのではないだろうか。本県の生涯学習・社会教育を巡る現状や課題が分かり、とても貴重な経験をさせていただいた。

委員 答申の感想としては、各委員からの意見が十分反映されていると感じた。私は青森市の社会教育委員も務めているが、青森市の場合は、施策を進めるための計画に対する意見を求められる場面が多い。私はNPO活動の支援を行う立場におり、対象を学生より社会人を主として考えることが多いので、県と市の2つの審議会を通して、学校教育など自分には無い視点を補うことができたことに感謝している。自身の社会活動としては、現在あおもりラジオクラブというNPOでインターネットを通じた情報発信を継続している。ミッションとしては、市民が主体となり情報を発信する機会を作ること、その人自身の成長や、その人が所属する組織や地域、そして社会全体の成長を目指している。この活動は来年で15年目を迎えるが、さらにその先も見据えて、時代の変化に合わせてどのように情報発信を行っていけばよいかを議論しているところである。この議論では、価値ある情報をどう伝えていくか、その人の言葉でどう伝えるのが大切であり、その機会をどう作って組織をどう育てていくのが課題として挙げられている。この点は、先ほど話題となったあおもり創造学に当てはめると、高校生が地域に関する学習成果や課題をどう発信するのか、その後成長した高校生が地域とどのように関わりを持つのが課題となると思われ、この課題は我々の活動にも十分関係することなので、一緒に考えていきたい。ここまでは情報を発信する送り手の視点での話であるが、情報を受信する受け手の視点で考えた場合、今回の答申ではつ

ながりが大事であることが示されており、これからの NPO の活動や地域づくりの活動に生かしていきたい。

委員 会長、委員の皆様、事務局の皆様、2年間大変お疲れ様でした。この2年間を振り返ると、いろいろな分野の専門家からお話を聞くことができ、自分も様々なことを吸収することができた。また、コロナ禍で私たちの生活も変化が激しく、コロナ禍以前のことがずっと昔のことのように感じてしまうほど、変化のスピードが速いが、このような中でも様々な活動をしている方々がたくさんいて驚いている。自分が携わっている「あおもり親楽プログラム」に関しては、小学校等での実践を通してこの学習の重要性や必要性を再確認している。親楽プログラムでは、生活の基本を学ぶことができ、「あおもり家庭教育 10 箇条」などについて考えるきっかけとなっている。これからも、「あおもり親楽プログラム」やこの考え方を様々な機会を通して広げていきたいと思う。

委員 生涯学習コーディネーターという資格を取得しているが、生涯学習とは、退職して時間に余裕ある方が趣味や自己向上のために勉強するというイメージしかなかったので、会議に参加し、たくさんの生涯学習の考え方を学ぶことができた。また、年配の方、子どもたち、障害のある方、ひとり親、外国の方などの生涯学習について全くイメージが無かったので、実地調査報告からさまざまな事例を聞くことができ大変勉強になった。全国でいろいろな生涯学習が行われていることや、青森県でも生涯学習審議会委員の方々がそれぞれの立場でいろいろな取組をされていることに驚き、感銘を受けた2年間だった。私は、これからも中学校の学校支援コーディネーターとして、またプラットフォーム事業事務局の一員として地域住民として自分にできることを模索していきたい。

委員 これまで民間団体の代表として生涯学習に関する事業委託を受けて実施してきたが、生涯学習に関するはっきりしたイメージは持っていなかった。2年間、生涯学習審議会に参加するなかで得られたイメージの一つとして、生涯学習・社会教育・学校教育はセットだということを感じた。これまでの生涯学習審議会の議論の中で自分が目指したことのひとつとして、市町村が取り組みたいと思うような手段を答申の中に載せることがあった。また、自身が民間団体を運営しているので、官民連携の必要性を実感しており、これを実践するためには、経済的な面での団体の継続性や維持という部分を考えていかなければならないと思っていた。この経済的な部分を考えていかないと、生涯学習が成り立たないと考えていたので、この点も答申の中に載せたいと思って発言してきた。最後に、運営している団体が今後取り組みたいこととして、部活動の地域移行がある。はじめに述べたように、生涯学習・社会教育・学校教育がセットであると考えた際に、地域のクラブやスポーツ少年団、部活動に他世代を巻き込みながら、子どもの教育に生かされるスキームはどうあるべきか考えていきたい。また、ここから発展させて、地域づくりにもつながる仕組みを考えていきたい。

委員 私が生涯学習審議会に参加している意味としては、高校生と生涯学習をどのようにつなげていくのか、生涯学習と学校をどうつなげていくのかということがあると考え、高校生と学校教育という2つの視点で発言してきた。先ほどの説明のとおり、県は全ての高校生に自分が住む地域について学ぶ学習をさせたいと考えている。これを実現させるためには多くの県民の協力が必要であり、本気の大人の姿を見せることが必要だと考えている。また、学校と社会教育をうまくつなぐことができたなら、学校教育は

もっとよくなるのではないかと考えながら会議に参加してきた。高校や高校生の現状をうまくお伝えできなかった反省点はあるが、自分自身非常に勉強になる2年間であった。最後に、本日オンライン参加であったが、会場の音声をうまく聞き取れない状況は初めてで、オンラインと会場のハイブリッド型の会議では、技術的な課題もあることを実感した。

(事務局から、会議欠席者からの感想メッセージを紹介)

委員 会長並びに事務局の皆様にもまずお礼を申し上げたい。会議は今日で終わり、後日教育長に答申が提出されるが、これで終わりではなくこれがスタートラインとなると考えている。今後、この答申の内容をどのように市町村、あるいは県民に浸透させていくのかということが課題であり、そのため今日からが新たなスタートだと思っている。

さて、大学教員として、学生あるいは私の研究対象である小・中・高校生と接している中で、最近の若者は学びの深さが足りないのではないかと感じる事が多くあり、この理由を考えた際に、気づいたことが2つあった。1つ目は、先ほど他の委員が発言していたが、我々は何のために学ぶのか、あるいは学習とは何のためにあるのかと考えると、個人の知識を蓄えること、個人のキャリアの獲得という意味があるが、それだけではなく、自分の獲得した知識や技能を使い社会とどのようにつながっていくか、つまり自分の豊かさだけではなくて、社会全体を豊かにすることが挙げられる。このような私達ももっと幸福になるために学びがあるという考え方が、今の学生には不足していると感じている。その理由を考えると、今の学生は、成功体験は多いが、学ぶこととは苦悩や苦痛、辛さもあり、それを乗り越えて達成感や喜びが得られるという一連のプロセスが弱くなっているからだと感じている。これは、行政だけの問題ではなく、我々大人社会がつながっていないことに問題がある。つながりや連携ということは、生涯学習審議会でも度々議論になったが、私たちの社会そのものがつながっているようでつながっていないことが問題であり、今回の答申で述べられているつながりを作ることは非常に重要であると思っている。

2つ目は、学習とは人間に欠かすことのできない権利だということである。答申の冒頭でユネスコの学習権宣言に触れているが、我々人間は学ぶ権利があり、この権利のもとに社会を豊かにしていくための学び合いがあるのであり、この権利を私達が守り育てていくことが重要なのである。この考え方は、今回の生涯学習審議会の議論の根底にあり、この考えを持ち2年間会議に参加してきた。皆さんと一緒にこの2年間学び合いができたことは、私にとっても皆さんにとっても、県民の皆さんにとっても、今後の豊かな学びにつながるものになったと思っている。

会長 通算3期、生涯学習審議会委員を務めたが、今回のテーマが最も包括的であった。特に今回、非常に印象に残っているのは、どのように社会的包摂の実現に取り組んでいくのかということをも県の生涯学習・社会教育の中心的な課題として取り上げたことである。これは今後、青森県の生涯学習・社会教育行政を振り返った時に、大きな転機となるのではないかと。また、今回の答申が、この後の施策に反映されることを期待している。

会長 その他、意見が無ければこれで今日の会議を終了とする。

3 閉会

(内容省略)